NEWS LETTER

都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

2012 1127

そぞろに冷たい日が続いておりますが、時節柄ご自愛のほどお祈り申し上げます。

ニューズレター都市史研究72号をお届けいたします。本号では10月に開催されたワークショップ「大山喬 平氏の中世社会史論に学ぶ」について報告いたします。また、本年度のシンポジウムの詳細が決定いたしましたのでお知らせいたします。さらに都市史シンポジウムに先立って行われる伊藤毅氏を研究代表者とした 基盤研究A「都市インフラストラクチャーの史的比較研究」主催による国際シンポジウムの告知もあわせて掲載いたします。新刊紹介では本研究会と密接に関連している飯田市歴史研究所から2012年9月に刊行された『飯田・上飯田の歴史』(上巻)をお届けいたします。

ワークショップ「大山喬平氏の中世社会史論に学ぶ」

2012年10月6日、京都より大山喬平氏をお招きし、ワークショップ「大山喬平氏の中世社会史論に学ぶ」を東京大学文学部多分野交流室にて開催いたしました。当日は午前に古市晃氏(神戸大学・日本古代史)と三枝曉子氏(立命館大学・日本中世史)によって大山氏の近著『中世のムラと神々』(岩波書店、2012年)の書評が行われました。午後は花田卓司氏(立命館大学・日本中世史)によって「ムラの戸籍簿」研究会の活動と報告に加え、日本近世史の立場から牧原成征氏(東京大学・日本近世史)から小報告がなされました。午前・午後をとおして大山氏から報告者へのリプライがあり、ワークショップ参加者間で活発な議論が行われました。また、日本中世史・近世史の研究者の多くの方々に参加いただき充実した交流の場ともなりました。以下に報告要旨と参加記を掲載いたします。

報告要旨 「中世・近世における下野国の郡域変動について―「ムラの戸籍簿」 作成からみえてくるもの―」

「ムラの戸籍簿」研究会(2009年4月発足)では、古代・中世の史料上、明確に「村」あるいは「郷」と表記されるものの初見事例を各国別・郡別に一覧表化し、これを土台に古代・中世のムラや地域社会の考察を進めている。本報告では、下野国「ムラの戸籍簿」作成作業を通じてみえてきた律令制的郡の崩壊と中世から近世にかけての郡域変動について検討した。

下野国では、天仁元年(1108)の浅間山大噴火により国南部が荒廃し、その再開発の過程で律令制下の郡域をこえた荘園や中世的郡(新郡)が成立していく。したがって、中世史料上には律令制下の郡名がほとん

どあらわれず、郷や村の上位の広域名称としては荘園名や新郡名が用いられるという特徴がある。律令制下の郡名は、天正18年(1590)の徳川家康関東入部後に復活するが、郡域は律令制下のそれとは異なる場合があった。

たとえば、寒川郡と都賀郡の場合、平安末期になると寒川郡東部に寒河御厨が成立する。寒河御厨は、隣接する都賀郡に成立した小山荘とともに小山氏の支配下にあり、のちに「小山荘」として一体化する。そのため、近世に至って寒川郡・都賀郡が復活する際、都賀郡は律令制下の領域に加え、中世以来小山荘と一体化していた寒河御厨の領域を包摂して復活し、反対に寒川郡は寒河御厨の領域を除いた、律令制下の寒川郡西部のみが近世寒川郡となる。

また、芳賀郡と塩屋郡についても、中世には芳賀郡南部が荘園化し、北部には塩屋郡南部とともに氏家郡が成立する。当初氏家郡を支配したのは宇都宮氏一族の氏家氏で、南北朝期には芳賀氏が、戦国期には宇都宮氏が郡一帯を支配下においていた。塩屋郡北部に成立した塩谷荘もまた、宇都宮氏一族の塩谷氏が戦国期まで勢力を張り、戦国末期には宇都宮氏が塩谷荘域の大部分を支配し、天正18年に豊臣秀吉より安堵を受けている。近世に芳賀郡・塩谷郡が復活するにあたり、氏家郡の領域は芳賀・塩谷両郡に分割されることなく、すべて近世塩谷郡に含まれることになるが、その原因は、『今宮祭祀録』にみえるような宇都宮氏と在地武士との今宮明神の祭礼を通じた被官関係、今宮明神を鎮守とする「氏家廿四郷」の地域的まとまりが、中世を通じて強固に形成されていたためと考えられる。

以上のように、下野国では律令制下の郡域とは無関係に荘園や新郡が成立し、中世を通じて領域的なまとまりを維持した結果、近世の郡域がそれに規定される側面がみられる。近世初頭には、慣習的に「真壁郡」や「氏家郡」といった中世的郡名が用いられる場合があるが、これは中世に設定された領域的なまとまりの規定性の強さを物語っているといえる。武士団の勢力範囲が古代の律令制的郡郷制、およびそれに伴う地域の単位を有名無実化し、新たな境界(そこに住む人々が認識する領域的なまとまり)を形成していく様相が、下野国「ムラの戸籍簿」の作成を通じてみえてくるのである。

花田卓司(立命館大学)

参加記

今回は日本中世史を長く研究し、近年「ムラの戸籍簿」作成などの活動を通じて、その議論の枠組みをさらに広げている大山喬平氏を招き、同実践や近著『日本中世のムラと神々』(2012)を中心に紹介及び討論が行われた。

まず『日本中世のムラと神々』について、古市晃氏(神戸大学・日本古代史)は、古代の様々な集落概念や治水共同体とムラの関係、さらにカミの祭祀が持つ意味を検討し、考古学的成果の理解による集落の実質的な持続性の検討の必要性や、水利や農業を行う機能集団でもあるムラが、政治性から自由たりうるかという問題を指摘、カミについては史料選択の妥当性と仏教の位置づけに疑義を提出した。

三枝暁子氏(立命館大学・日本中世史)は、まず大山氏の「ムラ」を、国家支配の及ばぬ自律性をもつ原初的人間集団が、政治性を帯びる段階へ変容する中で生まれ続けるものと捉え、生活ユニットとしてのムラと郡・郷・村との関係、またムラ相互を結ぶ地域形成原理としての宗教について説明した。また大山のカースト社会論を紹介し、宗教が「生まれ」により労働と身分を位置づけ、集団を他律的に秩序付けるとする議論と、神を祀るムラの自律性を示した叙述の併存を指摘し、最後にムラの持つ都市性に言及した。

午後は、立命館大学の花田卓司氏(日本中世史)が、「ムラの戸籍簿」研究会の実践を紹介し、下野国を

事例に、あらゆる史料から村・郷の初見を抽出する作業が、対象地の地域編成や時代区分などの問題発見や、 史料そのものの発掘、認知に有益であることを示した。

牧原成征氏(東京大学・日本近世史)は、中世末~近世初頭の郷・村の実態を紹介し、中世起源の郷帳の近世村でも中世史料に痕跡がないものが多く、近世村からの遡及の有効性を指摘された。また、地方文書に加え、歴史地理学や考古学、各種地図などの空間分析・情報の活用も助言され、他の参加者からも同様の指摘があった。

以下若干の感想を述べる。

まず、「ムラ」の政治性についての指摘が多かったが、もし、現在の我々の実証という行為が、社会史の名においてすら、無意識に歴史的事象を政治・経済的原理に還元することを最優先する態度を内在(継承)し、大山氏の近業が、一面それに対する柔らかな警鐘だとするなら、ムラの政治性の軽視ともみえる表現への批判より、人間集団に働く力学について素描的段階であっても別の方向性を探るその議論を深化し、豊かにする方法を探ってもよいのではないか。

氏の「多様性としての列島14世紀」は、歴史家の思想とその時代背景を描き興味深いが、近代においても、 労働と信仰、階級(を含む人間集団の層序)について、ウェーバーのような存在を持たない我々にとって、 近年の氏のカーストに対する示唆等は、網野との論争や前近代社会への適用の枠を超えて検討されていくべ きであろう。

また、地図や考古学的成果の援用の必要性は、妥当な指摘だが、画像記録等の技術面での時代的制約も嘆かざるを得ない。筆者は、平成4~6年度に京都大学の中世史専攻に在籍し、4~7年度の兵庫県大部荘調査(京都大学文学部博物館編『荘園を読む・歩く:畿内・近国の荘園』(1996)、また川端新『荘園制成立史の研究』(2000)該当部等参照)に参加したが、アナログGISであっても、地図を極大コピーし、公民館で一筆一筆の田地の水利から隣保の状況、風俗慣習まで聞き取り、図に落とした経験は、空間が持つ歴史伝達力の豊饒性を一学生に思い知らせる程度には強いものであった。

ムラが消えつつある今、その「戸籍簿」作成が史料によってのみ行われている印象を与えがちだが、その 背景には、氏が見た無数のムラの光景があると考えている。

江下似知子(東京大学工学系研究科)

シンポジウム開催のお知らせ

このたび、都市史研究センター(とらっど 3)+都市史研究会では、12月15日、16日と2日間にわたって、下記の要領で2012年度 都市史研究会シンポジウムを開催いたします。本年のシンポジウムは「沼地と都市」をテーマとして、6名の報告者に研究報告を行っていただきます。ふるってご参集下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

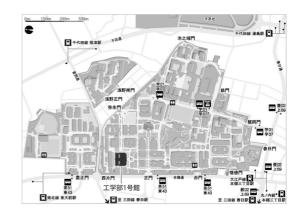
都市史研究会シンポジウム「沼地と都市」

日程: 2012年12月15日(土)、16日(日) 場所: 東京大学工学部一号館 15号教室

(東大正門を入り、左手方向の建物 1F)

主催: 都市史研究会・とらっど3

参加費: 500円



第1日目 報告 (14:00—17:15):

主題報告「沼地と都市」伊藤毅(東京大学)

個別報告1「沿岸域における大名江戸屋敷の形成一汐留遺跡」石崎俊哉(東京都埋蔵文化財センター)

個別報告2「江戸深川猟師町の形成と深川地域の開発」髙山慶子(宇都宮大学)

個別報告3「近世オランダ・フリースラント小都市の社会と空間」髙橋元貴(東京大学)

第2日 報告 (10:30—14:20):

個別報告4「オランダ・フリースラント、低地地域における都市形成」宮脇哲司(東京大学)

個別報告5「沼+港=沼津?―中世の沼地と都市」高橋慎一朗(東京大学)

個別報告6 「イタリア・アルノ川の流域整備とヴィラ」赤松加寿江(東京大学)

全体討論(14:40-16:45):

コメント 野口昌夫 (東京藝術大学)・吉田伸之

※第2日目終了後は懇親会を予定しております。

問い合わせ先: tradcities@gmail.com

国際シンポジウム開催のご案内

2012年12月3、4日の両日にわたって伊藤毅氏(東京大学)の科研(基盤研究A)「都市インフラストラクチャーの史的比較研究」主催による国際シンポジウムを開催いたします。国内に加えイタリア・フランス・オランダより建築史・文献史・考古学の専門家を招き、歴史的観点からみた都市空間の諸相、都市のインフラストラクチュア、さらに都市を包含する領域的ひろがりと人間との関わりについて研究報告を行っていただきます。直前のお知らせとなってしまいましたが、みなさまのご参集お願い申し上げます。

国際シンポジウム:

歴史都市の空間・文化・持続再生一都市インフラおよび〈領域〉的視座の国際比較

[英題: Space, Culture, and Regeneration of Cities in History—From the Viewpoint of International Comparison of Territory and Infrastructure]

日程: 2012年12月3日(月)、4日(火)

場所: 東京大学工学部一号館15号教室

主催: 2009-2012年度科学研究費基盤研究A「都市インフラストラクチャーの史的比較研究」 (研究代表者: 伊藤毅 | 東京大学)

後援: 東京大学GCOEプログラム「都市空間の持続再生学の展開」都市空間文化再生(S3)部会都市史研究会、ぐるーぷ・とらっど3

参加費: 無料 定員: 100名

申込方法: 当日先着順

第1日目 (9:00—17:30)

イントロダクション:伊藤毅(東京大学)

基調講演:陣内秀信(法政大学)

第1部 水と領域 — Water and Territory :

ジャンカルロ・パーバ (フィレンツェ大学) / ヒレス・デ・ランヘン (フローニンヘン大学) / 杉浦未樹 (東京国際大学) / ジャン=ルー・アベ (トゥールーズ大学)

第2部 山と領域 — Mountain and Territory :

マッテオ・ダリオ・パオルッチ (法政大学) / 伊藤毅 (東京大学) / 初田香成 (東京大学) / 野口昌夫 (東京藝術大学) / 加藤玄 (日本女子大学)

第2日目 (9:30—17:30)

第3部 文化と技術 — Culture and Technology in Territory :

加藤耕一(東京大学)/中島智章(工学院大学)/赤松加寿江(東京大学)/パオラ・ファリーニ(ローマ大学)/ハンス・ファン・メーレンドンク(オランダ・フリースラント州)/坂野正則(武蔵大学)/ジャック・トマス(トゥールーズ大学)/渡辺真弓(東京造形大学)

全体討議

総括コメント: 吉田伸之

問い合わせ先:

〒113-8656 文京区本郷7-3-1東京大学大学院工学系研究科建築学専攻伊藤毅研究室 電話03-5841-6185 / E-MAIL: symposium@itolab.org、URL: http://symposium2012.itolab.org/

出版物のご紹介

2012年9月に都市史研究会と密接に関連している飯田市歴史研究所から『飯田・上飯田の歴史』上巻が刊行されました(下巻は3月刊行予定)。

飯田市ウェブサイトより解説、本書から目次を転載いたします。

飯田市歴史研究所編 『飯田・上飯田の歴史』(上巻)(飯田市教育委員会、2012年) 旧飯田町・上飯田町(村)地域の歴史を叙述した『飯田・上飯田の歴史』上巻を刊行いたしました。 本誌は序章・終章・本編8章からなる10章立てです。序章では飯田・上飯田地区の自然環境やこれま での研究の流れについて概説し、本編8章で原始・古代から江戸時代の飯田・上飯田地区における歴史 を取り上げ、終章で幕末の情勢をふまえつつ、本編の内容をまとめています。

各章は全体の流れをつかむための「総説」と、個別のテーマを掘り下げて解説する節やコラムで構成されています。豊富な資料の写真や図版でわかりやすく飯田・上飯田地域(橋北・橋南・羽場・丸山・東野)の歴史を学ぶことの出来る一冊となっております。

(飯田市ウェブサイトより)

目次

序章 前近代の飯田・上飯田

飯田・上飯田をとりあげる意味/飯田郷の歴史への関心/地理的位置と自然のあらまし/大地をつくるもの―地質 ―/大地をつくる営み①―活断層―/大地をつくる営み②―扇状地と段丘―/微地形と土地利用/土砂災害/飯田・上飯田の歴史を学ぶために/原始・古代から鎌倉時代まで/室町時代から戦国時代へ/城下町成立の意味

第一章 原始・古代から中世へ

第一節 総説/第二節 段丘上の縄文ムラ/コラム 丘の上最古の足跡/コラム 祈る・まじなう―縄文人の精神世界 ―/第三節 飯田・上飯田の弥生時代/第四節 発掘された飯田・上飯田の古代/コラム 恒川遺跡群の発掘調査―伊 那郡衙の発見/第五節 木簡から伊那群のなりたちをみる/コラム 古代から中世へ/第六節 中世の「飯田」を探る 手がかり/コラム 白山信仰と風越山

第二章 中世・戦国から近世へ

第一節 総説/第二節 中世の争乱と飯田郷の寺社/第三節 飯田城の築城と坂西氏/コラム 飯田城の移り変わり/ 第四節 武田信玄の下伊那侵攻/コラム 武田氏の在地支配/第五節 織田信長と飯田/コラム 信長、飯田での三日 間/第六節 徳川家康領国下飯田城/コラム 知久平城から飯田城へ

第三章 城下町飯田の成り立ち

第一節 総説/第二節 城下町飯田の形成/コラム 上飯田村と庄屋源四郎/第三節 堀氏と城下町飯田/コラム 堀 氏について/第四節 大宮諏訪神社の境界争い/第五節 飯田藩の財政と町役人/コラム 元禄十四年 米津留訴訟一 件/第六節 城下町飯田の町と商売物/コラム 「役用古記録抄帳」と町役人の仲間/コラム 城下町のメンテナンス

第四章 城下町飯田の社会

第一節 総説/第二節 城下町飯田の武家地/第三節 産業の変化と職人/第四節 千人講騒動/コラム 幕末期、飯田 城下の打ちこわし騒動/第五節 飯田藩と紙の流通/コラム 飯田と競合する八幡町/第六節 城下町飯田の周縁― 扇町―/コラム 扇町に生きた人びと

第五章 上飯田村の成り立ち

第一節 総説/第二節 上飯田村への町人の進出/第三節 質に入れられる女性や子ども/第四節 野底入山論と東野/第五節 松川入山論と羽場/第六節 風越山と中山道の人びと

第六章 上飯田村の社会

第一節 総説/第二節 上飯田村の内分け/第三節 羽場の百姓と山林資源/第四節 中山道・東野生活世界/第五節 出来分の生活世界/第六節 大平の開発と発展/コラム 山田屋新七と飯田藩の御用米

第七章 自然と人びとの営み

第一節 総説/第二節 城下町の暮らしと近隣の山々/第三節 町と村の生活と「御用水」/第四節 度重なる満水・川除/コラム 榑狩人足と河越人即/第五節 箕瀬町の文政六年庄屋火事/コラム 火消の纏と羽織/第六節 天明の 飢饉/コラム 和合相続金と和合籾

第八章 育まれた文化

第一節 総説/第二節 寺子屋で学ぶ子どもたち/第三節 町と村の祭り/第四節 飯田町人の文芸/コラム 白山社 の奉納額と文化的活動のひろがり/第五節 堀家蔵書と近世の学問/第六節 城下町と村の建築/コラム 商家の隆盛を示す発掘出土品

終章 幕末維新期の飯田・上飯田

近世後期の飯田藩政/幕末維新期の飯田・上飯田の商工業/幕末維新期の上層町人/幕末維新期の上飯田村/幕末維新期の民衆世界/天狗党通過の衝撃

巻末資料

飯田・上飯田の歩み―原始・古代から近世まで―/上巻の舞台/飯田・上飯田の遺跡・古墳/江戸時代の飯田城下 図/飯田藩職制(脇坂家・堀家)/飯田藩の村役人・町役人/主な参考文献―より深くしるために―

News Letter 都市史研究 Vol. 72 2012年11月27日発行

事務局:〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学大学院工学系研究科建築史伊藤研究室内編集担当:髙橋元貴(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻) レイアウト原案:岩本馨(京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科)